

農村を守る

18 心をつなげる

農村には、昔から受けつがれてきた伝統や文化があります。そこには、人びとのどのような思いがこめられているでしょうか。

問 農村に伝わる民話を読んで、村や仲間を守ることの大切さを考えましょう。

民話：「稲むらの火」(和歌山県) 出典：稲むらの火 (初等科国語六より) 作者＝中井常蔵 (三ツ橋常蔵)

「これはただ事ではない。」とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地震は、別に烈しいという程のものではなかった。しかし、長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない不気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下ろした。村は豊年を祝うよい祭りの支度に心を取られて、さっきの地震には一向に気が付かないものようである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸いつけられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いていて、みるみる海岸には、広い砂原や黒い岩底が現れてきた。

「大変だ。津波がやってくるに違いない。」と、五兵衛は思った。このままにしておいたら、四百の命が、村もろとも一のみにやられてしまう。もう一刻も猶予はできない。

「よし。」と叫んで、家に駆け込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛び出てきた。そこには取り入れるばかりになっているたくさんの稲束が積んである。

「もったいないが、これで村中の命を救えるのだ。」と、五兵衛は、いきなりその稲むらの一つに火を移した。風にあおられて、火の手がぱっと上がった。一つ又一つ、五兵衛は夢中で走った。こうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまうと、松明を捨てた。まるで失神したように、彼はそこに突っ立ったまま、沖の方を眺めていた。

日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなってきた。稲むらの火は天をこがした。山寺では、この火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。庄屋さんの家だ。」と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。続いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追うようにはかけ出した。

高台から見下ろしている五兵衛の目には、それが蟻の歩みのように、もどかしく思われた。やっと二十人程の若者が、かけ上ってきた。彼等は、すぐ火を消しにかかるとうとする。五兵衛は大声で言った。

「うっちゃっておけ。一大変だ。村中の人に来てもらうんだ。」村中の人、おいおい集まってきた。五兵衛は、後から後から上ってくる老幼男女を一人一人数えた。集まってきた人々は、もえている稲むらと五兵衛の顔とを、代わる代わる見比べた。その時、五兵衛は力いっぱい声で叫んだ。

「見る。やってきたぞ。」たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指差す方向を一同は見た。遠くの海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。その線は見る見る太くなった。広くなった。非常な速さで押し寄せてきた。

「津波だ。」

と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のように目の前に迫ったと思うと、山がのしかかって来たような重さと、百雷の一時に落ちたようなとどろきとをもって、陸にぶつかった。人々は、我を忘れて後ろへ飛びのいた。雲のように山手へ突進してきた水煙の外は、一時何物も見えなかった。

人々は、自分らの村の上を荒れ狂って通る白い恐ろしい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。

高台では、しばらく何の話し声もなかった。一同は波にえぐりとられてあとかたもなくなった村を、ただあきれて見下ろしていた。

稲むらの火は、風にあおられて又もえ上がり、夕やみに包まれたあたりを明るくした。はじめて我にかえった村人は、この火によって救われたのだと気がつく、無言のまま五兵衛の前にひざまずいてしまった。

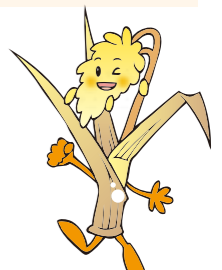
注) 猶予(ゆうよ)：ぐすぐす引きのばして決めず、やらないこと。稲むら(いなむら)：取(しゅう)かくされた稲のたばをつみかさねたもの。やる日を先のばしにすること。

松明(たいまつ)：松のやにの多い部分をたばねたもの。火をつけて照明にする。早鐘(はやかね)：火事など、人びとにあぶないことを知らせるためにならした鐘(かね)。稲束(いなたば)：かり取った稲(いね)をたばねたもの。いなたば。いねづか。百雷(ひゃくらい)：たくさんのかみなり。とても大きな音や声にたとえる。

※引用文については、旧漢字は新字体で、旧かなづかいは現代かなづかいで表記してあります。

ふかめる 農村に伝わる民話

「稲むらの火」は、江戸時代、和歌山県でほんとうにあったことを民話にしたものです。かり取った大切な稲をもやして村の人に知らせ、みんなの命を守った話です。このような古くから言い伝えられてきた民話には、農村のくらしを守り、人と人をつなげ、地域を守ってきた人びとの願いと生活の知恵がこめられています。



問 農村に伝わる行事や芸能には、どのような思いや願いがこめられているでしょうか。

伝統行事・お祭り

農村に受けつがれているお祭りには、豊作や家内安全、健康などを神にいのるという意味があります。また、お祭りを楽しむことで、地域の人びとが交流し、農作業などをおたがいに助け合うことにつながりました。



豊かな実りを願い、雨に見立てた砂をかけ合う廣瀬神社の「砂かけ祭り」(奈良県河合町)

農村の伝統芸能

手作業で田植えをしていたころは、その土地に古くから伝わる「田植え歌」を歌いながら作業をしていました。また、農作業を楽しく行うため、「田楽芸」でリズムをとっておどりながら作業を進めました。豊作を神にいのるために、今でも「田楽芸」を行っている地域があります。



川のはらんを防ぎ、豊作を願って、田植えから稲かりまでを舞で表現する「藤守の田遊び」(静岡県焼津市)

ふかめる 農村の「結い」

「結い」とは、日本各地の農村で、住んでいる人びとがともに助け合って村をつくり、いっしょにくらしてきた古くからの助け合いの心です。岐阜県白川郷には、世界文化遺産である「合掌づくり」のかやぶき屋根をふきかえるときなど、今も「結い」の精神が生きています。

自分の住んでいる地域や近くの農村には、どのような伝統行事や伝統芸能が根づいているか調べ、考えたことを書きましょう。



.....

.....

わたしたちのくらしと農業
日本の農業のすがた
米つくりと田のはたらき
農産物をつくる
農産物をとどける
日本の食たのすがた
農村を守る
資料